

ただひたすら想いあうこと

情報通信工学科2年 高橋 万奈

七歳の知能しかもっていない知的障害者に子供を育てることはできるか？私は、この本を読むまでは、父親でも母親でも七歳の知能だったら子どもを愛せないのではないか、親としての意識が薄くてちゃんと責任がとれないから、子どもを育てるとなれば難しいだろうと思っていました。

この本を読み終った時、改めて親子の絆の深さを思い知らされました。知能とかでなくももっとも重要な愛情のすごさや大切さを確認する事ができました。七歳の知能しかもたない父親サム、父親の知的年齢を追い越した娘ルーシー。この親子の間には、確かに深い絆がありました。

ルーシーは自分の父親の知的年齢を追い越して、父親が少し違うという事に気づき始めました。それでもルーシーは、

「パパが好き。パパの子でよかった。だって、ほかのパパは公園で遊んでくれないもん。」

と、言いました。私はここを読んだ時、ルーシーの父親を想う気持ちにとっても感動しました。

「パパの子どもでよかった。」

なんて子どもから言われる父親が何人いるだろうか？どんなに立派な父親でも、本心でこんなことを言ってもらえるのは数人だと思います。だから私はサムは本当にすごいなと思いました。知能なんかよりも、ただひたすらに愛するという気持ちなんだな、と思いました。

私は、この本の中でとても心に響いたサムの言葉があります。サムが裁判官に、ルーシーが十三歳になっても育てられるかと聞かれた時のサムの返事です。

「…ぼくにはずっと考えてきたことがある…いい親になるには、どうすればいいか。それは、いつも変わらないこと。辛抱強く、話を聞いてやること…話がわからなくても、聞いてやるふりをする。そして愛すること。」

あっ！こんな簡単な事…でも本当に一番大切な事。私はこれを読んで、なんとも言えない感情に襲われました。簡単すぎてびっくりしたんだと思います。でもみんなこれができるんだと思います。忙しいと言って子どもの言葉に耳を傾けない親。話を聞いてもらうのはとても単純だけど、でもとても嬉しい事です。簡単だけど、難しいこと。簡単だけど、なかなかできない事。簡単だけど、一番大切な事。こんな簡単なことだけれど、絆はとても深まると思います。親達にとったら直球で胸に響く言葉はずです。私も胸にしまつて親になった時思い返してみたいです。

この本から私は、たくさんの事を学びました。サムの言葉に、

「ぼくの手本は、ぼくです。」

と、という言葉があります。親になると迷いとかも出てくると思うけど、子育てに間違いも正解もないと思うので、自分を信じ、自分を手本にしたらそれが多分正解だと思います。これは人生にもあてはまると思うので、私にも目標とかあるけど、最終的に追い越さなくてはならないのは自分で、最終目標も自分だと胸を張りたいです。私の人生の手本は私です。

この本を読み終えて、七歳の知能だけではいろいろな面で限度があるから、手助けは必要だけど、一番大切な心、愛といった面では、他の父親にも劣らないほど立派な父親になれるという事が分かりました。

どんな人でも、ただひたすらに愛する事。純粹に愛する事。お互いに想い合う事。一番大切な事。この本を読んで改めて思い出されました。この本と出会えてよかったです。

「 I am Sam 」

脚本 クリスティ・ジョンソン ジェシー・ネルソン

竹書房文庫